

# アナザーブラザーズ（ニセコイ）

EX BOX

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

突如として成り行きで渋谷に出掛けてた金髪の男の子がいた。父がアメリカ人で

母が日本人のハーフだ。

そして突如として隕石が落ちてきて少年は直で隕石にぶつかり死亡したはずだった。

原作主人公に憑依して天の道を行き

総てを司どる彼の物語りがはじまる。

目次

第1話	1
キャラ解説&設定	7
第2話	12
第3話	17

## 第一話

10年前あの日

宇宙の落とし物により

渋谷のど真ん中で災害により1万5000人の命が奪われた。

そしてその1万5000人の中に

一人の金髪の青年がいた。

そしてその宇宙の落とし物は人を奪ったがそれだけじゃなかったんだ。

…

ザクシャ イン ラブ（愛を永遠に）

とある山頂で2人の男女の子供の内

少女が話はじめて。

貴方は錠を私は鍵を肌身離さずずっと大切に持っていてよう

いつか私たちが大きくなって再開したら

そのでこの中の物を取り出すから

そしたら

少年「うん」

???×少年「結婚しよう。」

それにより10年後たっても

錠はまだ開かないままである。

ただ開かないだけなら良かった

俺はその運命の人と出会いたくはなかった。

… 何せ俺は約束した本人ではないからだ。

アナザーブラザーズ（ニセコイ）

第一話 約束と再開

俺の本当の名前は総司

俺の見た目の判断では

腰にカブトムシのような何か付いてるベルトを  
着けてる点を

覗けばこの春から高校に通うどこにでもいる  
普通の高校生だろう。

色々と事情がある俺だが

今俺は奴らの分も入れた朝飯を作っている。

「奴ら」というのは

総司「オイ飯が出来たぞ」

俺がそう掛け声をかけると

??? おおはようございます

??? お坊ちゃん

複数の男たちが俺にそう返事をする。

そいつらは背中に入れ墨をしており

顔に傷があるやつもいる。

俺の色々な事情の中で

この体の持ち主の家族はヤクザであった。

そのヤクザの名前は集英組と

どこぞの集●社の漫画の会社のような名前だが…

まあ極端に言えばこころじゃ有名なヤクザの元締めで俺はそのヤクザの一人息子で気付いたらその子に憑依していたのである。

「うんめえーさすが坊っちゃんだ。」

「いやーいつもすみやせん。」

そういい箸をカカカカと音を立てて俺の料理を食べているヤクザ達が俺に感謝と謝罪を告げる。

総司「とある人が言っていた病は飯から食べると言う字は人が良くなると書く。

俺しか料理出来ないなら

上手いものを毎日食えると思えば

何でもないさ。それに

食事は一期一会、毎日毎日大切にしろと

言ってたしな。」

「さすが坊っちゃん私感激つす。」

「素晴らしいつす二代目。」

「まさに男の中の男です。」

俺の言葉にヤクザ達は感動し

俺を褒め称えているが、

総司「悪いが俺は今の所二代目にはならない」

ヤクザ達「ええーそんなあ」

(そう俺は今のところ二代目になろうとは思わない

俺の将来の夢は自分のお店を持ち料理を  
することだからだ。だからそれと正反対な  
ことをする予定はない。」

俺が心のなかでそんなことを浮かべる中

??? 「やれやれ毎日せわしねーなてめえは」

どこからかそんな声が聞こえてきた。俺は  
その声をした方へ振り替える

部下達 「組長おはようござえーやす。」

総司 「親父か…。」

「そうだ楽近い内に大切な話が

あるから覚えておきな。」

総司 「あ？大事な話」

何度も言うが俺は総司という名である。

本来の持ち主の体の名前が楽だからだ。

そんなことより親父がふと思い出したかのように

俺に話をふってきた。

俺はその話になつたが

ふと左手に付いている腕時計を見る。

「そうかももうこんな時間か」

小さく呟いたが

「なにい!? そいつあいつあいつねえ!!」

「すぐにリムジンを御用意しろ!!」

「ばか野郎15m級のだ!!」

ヤクザの一人龍が俺の小さな声を聞き取り

部下に指示をだす。  
……

その後どうだったかと言うと  
普通に登校した。

飾りをつけた所で

俺自身が目立たなくては意味がないからだ。

校門をくぐり俺は出発する前に

リムジンに停止をかけたあとことを振り返った

俺の意思で強制的にそうしたあと

龍達が

ギヤングとドンパチしたと言っていた

もしその相手のギヤングが●●●の所じや

なきやいいが。

俺がそんな考えことをしてるなか

足元の影が一つ増えた。

俺は気配を感じ左の塀の上を見る

??? 「げ」

総司「……」

普通なら想定してないであろう2 m越えの塀から少女が飛んで来  
たことにより下にいる男子は

間違いなくぶつかるもしくは潰されるだろうが

彼は普通じゃない

彼はそのまま落ちてくる少女を

??? 「え?」



お姫様だっこして受け止めたのだ。

総司「だいじょ…ぶ…か!？」

???「ええこっちは大丈夫よ？」

ふいにお互いの顔を見る。

その時、総司は彼女の顔を見て驚いた顔をした。

総司(●●●●に似ている!?)

俺はさらに少女の顔を見つめた。

??? (何か凄い目を開かして見てるんですけど!?)

見つめられる少々からにすれば

凄い迫力な顔をしてるのでただ驚いていた。

そしてこの無言の中先に行動を起こしたのは  
少女だった。

???「ねえそろそろおろしてくれない？」

総司「…ああ…悪い」

少女の言葉により気付き腕からおろす。

そして目の前から走って消えてく少女を

見ながら俺は確信する。

「あれは間違いなく」

●●●●だ。

## キャラ解説&設定

桐崎 総司

史上最強の男

前世を含めば20歳

突如隕石により彼は帰らぬ人となった。

だが数年後により本来の主人公

一条 楽に憑依した形で生き返り

今まで生きてきた。

仮面ライダーカブトのアイテムを使う

天道 総司に似た別物であり

もしもの平行世界のようなもん。

桐崎 千棘

主人公の妹である

原作と違い錠を無くさなかったし

口喧嘩もしなかったことにより仲は悪くは

なかったが良い訳でもなかった。

彼女は兄の死を受け入れておらず

何処かで生きているのではと信じている。

鷗 誠士郎

本作のヒロイン

クロードに拾われ悲しくも男と間違えられ

男のような名前をつけられたが妹と総司により

鷗という名をつけた。

総司の希望によりクロードから俺が彼女を

鍛えることを父に志願した。

るり

小野寺の親友

基本的に総司に関わらないが

親友が良く関わるので成り行きで一緒にいることがしばしば。

小野寺 小咲

ヒロイン

もともとこの体（一条 楽）が好きな相手でありこの体による影響か魂が溶け込んだのか知らないが総司は彼女にも意識し始める。

橘 万里花

通称千葉県のYさんの嫁

総司は前世、少しだけならあつたことがある。

奏倉ゆい

又烧会のボス

彼女も前世の時知り合っており

彼女がまだボスが付く前に総司が乗り込んできて戦ったという話がある。何故乗り込んだかは不明それにより一時的におとなしくなっていて少し制御が効くようになった。そして羽がボスに就任し部下達を制御した。

クロード

鷓の最初の師匠であり

総司の元先輩

俺が抗争に出るのを反対していたが  
実力を認められ抗争に出るようになる。

そして相棒的な存在になったのだが

10年前の渋谷の隕石の時に彼は死亡した  
ことにより妹の千棘にたいし過保護になっている。

アーデルト

ギヤング組織ビーハイブのボスであり

前世の総司と千棘の父である。

桐崎 華

前世の総司と千棘の母であり

現役バリバリの女社長であり

家族で一番の権力者

総司が3歳のころ母と共にパートナーを組んで  
仕事をしていた。二年後総司はお試し期間が  
過ぎたのでやめたがもし社長を引き継げるのは  
世界で俺しかいないなと母の凄さを実感した。

ワーム

仮面ライダーカブトに出てくる怪人である。

隕石に内包されて地球に飛来した地球外生命体であり、地球上に棲  
息する虫・甲殻類に似た外観・特性を持つ。高度な知性と後述する  
特殊な形態・能力を駆使し、密かに人間を殺害しながら繁殖し続けて  
いる。

とある回想

これはまだ総司が楽に転生する前のお話。

鵜「総司様何故ギャングのボスの子であるのに危険な抗争に出るのですか？」

総司「それは俺が世界で中心に回ってるからだ。」  
鵜「？」

総司「俺はいずれこの世の頂点に立つ男だ。なら自らその存在を知らしめたほうがいいだろ。」

鵜「良くわからないけど凄いですね？」

総司「まあそれよりも別に俺は様なんて付けなくてもいいよ。」

鵜「そ… そんな!?!お… 恐れ多い無理ですよ」

総司「気にするなよ俺がそうしろって言ったんだそれに正義は俺、俺自身が正義だ。」

鵜「理屈は良く分かりませんが分かりました総司。」

総司「じゃあ俺も鵜って呼ばせて貰う」

鵜「…」

総司「…」

鵜「ハハハハそれいつもと呼び名変わらないじゃないですか。w」

総司「そう言えばそうだなw」

タイトル「鵜と総司」

## 第2話

少年は転校生を庇いながら  
ワームと戦っている。

??? 「●●ちゃん!!」

少年は吹き飛ばされ転校生が心配で呼んでいる。  
総司「大丈夫だ。対してダメージは受けてない」  
今俺はマスクドフォームの姿のまま  
レーザー銃でクロップアップ中のワームと  
対決していた。

「やっぱりだ天は俺に味方してくれている。  
とある人が言っていた俺が望みさえすれば  
天は絶えず俺に見方してくれると」

…

俺は学校に着き色々とおつたが  
(ガラガラララ)と扉を開ける音を  
立て教室に入る。

俺は両手でポケットを鷲掴みしながら  
堂々と自分の席へと進む。

???

「オース総司、今日の転校生しってるか。  
噂によれば美女なんだとよ」

???

「おはよう楽くん今日も堂々としてるね。」

突如俺に話しかけてきた二人の男女の内  
俺を総司と呼んだのが集といい  
数少ない俺の正体を知ってるものである。

そして楽と呼んだ女性は

たぶんだが10年前の約束の相手であろう

小野寺 小咲だ。

総司「誰で有ろうと関係ない転校生にも教えて  
やろう俺が何者で偉く運命に選ばれし者をな。」  
そう言い俺は窓側を背中に向け俺は  
天道ポーズを取る。

その時光が突如として強く降り注ぎまるで  
意図して彼を照らしまるで運命さえ彼を  
味方してるかのようにそんな特別感が  
彼に感じられた。

チーコーンカーンコーン

小野寺「あ！予備チャイムなったし座るね」

集「総司じゃ休憩後にまた話そうな」

そういい二人は俺から離れ自分の席へと着いた。

…

先生「よし今日は転校生を紹介するぞー」

「入って桐崎さん。」

ザワツ



おおー！！

千棘「初めまして！アメリカから転校してきた桐崎千棘です。」

総司（やっぱりそうだ）

「母が日本人で父がアメリカ人のハーフですが日本語はこの通りバツチリなので皆さん気さくに接して下さいね！」

うおー！！かわいいー！！

足細ー！！何あのスタイルー！！

このクラスのちよつとしたバカ騒ぎの中で異様に府陰気が違う彼に目が行ってた人がいた。小野寺（あれ総司くん何か立とうとしてる？）

彼女の言ってたことは正解出会った。

彼は座りながらイスをずらし立つスペースを作り彼はスーっと立ち上がったのだ。

先生「じゃーひとまず空いてるせ…き…に？何してるの一条くん？」

総司「とある人が言っていた天の道を行き

総てを司どる男」

そう言い彼は転校生の方へと指を指し

「俺の名は天道総司」

そういつものパターンな自己紹介をする。

そう…いつもなら

「又は桐崎総司と言う。覚えときな」

クラス全員十先生「……」

小野寺（かつこいいなあ）  
るり「……」

この時新たなパターンを聞き耐性が無いので  
ほとんどが衝撃的すぎて思考が停止した。

そしてつとも衝撃を受けたのは

千棘（確か堀の下にいた男子よね？桐崎総司って  
私の●●の名前……いやあいつのジヨークよね？  
そんな偶然有るわけがない……よ……ね。」

集（なるほど転校生が……）

……

千棘「ねえ貴方あの自己紹介って誰かからの  
受け売りかしら？」

俺は突如として彼女に問い詰められていた。

いくら何でも今回は簡単には教えられない物だ  
だから

総司「それが知りたいんなら俺に付いてこい。」

千棘はついて来るだけで教えて貰えるなら  
と考え黙ってついていく。

そして着いた先はというと

「でっ…何で私が貴方の下に付いて

動物のお世話をするはめになってるわけ!？」

彼女は何故か総司と共に飼育係に入っていた。

総司「俺の秘密を教えるんだそれに似合う  
等価交換ってやつだ。まあ一週間耐えたら  
教えてやるよ。」

(俺は別にそんなことをしなくてもいいが彼女の  
本気度が見たいので試練を与えた。)

(冷静になれ私。パパや皆は死んだとか  
言ってたけど、もしかしたら手がかりを  
見つけられるチャンスなのよそれに期間が  
あるじゃないなら大丈夫よ。)

こうして千棘は総司の秘密を知るための  
一週間戦いが始まるのだった。

### 第3話

前回のあらすじ

千棘は総司の自己紹介に兄の自己紹介と似ているだけではなく突如兄の名が出ることに驚くもしかしたらと兄を知ってるのかと聞きに行く。

総司は千棘の質問に対し俺は教えてやるが条件をした。

一週間俺の下で耐えたら教えてやるという条件だ千棘は果たして乗り切ることができるのか？

「で、私はここで何をすれば言いわけ？」

千棘は新人なのでこの学校の飼育係は何をすれば分からないので俺に質問してきた。

総司「まずは場所案内をするよ」

千棘「今見えてるこのフロワだけじゃないの？それに右手に持っているリモコン？をなぜ今持っているの？」

「質問は後にしてくれまあ一見この場所にしかないように見えるだろうが（ポチ）」

くウィーンンンと効果音と共に

地面からエレベーターが出てきた。

千棘「え?!」（普通の学校でこんな仕掛けがあることに不意をつかれ驚いていた。

総司「これで地下にいくぞ。」

…

総司「ここが地下だ。どうだまるで別世界だろ。」

千棘「…」

エレベーターから50秒くらい下り

扉が開いた先は大自然が広がっており

天井を見上げてると

何故か地下であるはずの場所なのに

青空が見えたりまさに彼が言った通り

異世界に迷い混んだ感覚だった。

あと私の個人的な客観的な感想だけど

彼が私に説明してるとき

少し嬉しそうな顔をしていた。

あれから私は彼に色んな場所を案内してもらった

この地下には三層になっており地上に近い

所から一〜三層と数えるらしい

今回1日目は一層の案内と地上に戻っての

餌やりだけだった。

彼が言うにはこの地下を俺達で作ったと

言っていたから他にも飼育係とかいるんだろうか？

とりあえず今日はこれで終わった。

学校2日目

千棘「おはよう皆」

クラスメイトa「桐崎さんおはよう」

クラスメイトb「桐崎さん日本語大丈夫とか言ってたけ

日本語は日本人でもややこしいと思う所があるし

困ったら気軽に話かけてね。」  
クラスメイトc「桐崎さーんねえねえ私と友達になろうよ」

私、桐崎千棘は現在クラスの皆に注目の的になってます。

夢にまで見た華々しい高校レビューに成功しました。

そして私は自然に彼（総司）の席の場所に方向を向け挨拶しようとした。

「一条くんおはよ…う。」

だが机だけがあつて彼はいなかった。

（キーコーカーコー）

学校のチャイムが鳴るこれは予備チャではないこれは授業開始のチャイムだ。

キョーコ先生「はい皆おはよう」

鳴り終わると共に扉が開き先生が入る。

彼女はキョーコ先生でありこの1-Cの担任である。

クラスが先生に挨拶を返しSHRが始まる。では出席を取りまーす。

…

その後、彼は現れず現在は昼休みになった。今日は休みなのか？そう思いクラスの皆に聞くことにした。

「総司くんのこと？」

千棘（総司…）

私は自分にしか聞こえない声で呟く

A「あ！自分を総司とか言うけど彼の本名は一条 楽なんだよ。あいつ天のえくとなんだっけ？」

クラスの女子Aさんが他の女子を聞いてそれが話題となっていた。

ある女子は「天井の実を行き…」や「天の剣を取り…」などだんだんと原型がなくなっていく。そして話がすでに脱線していった。

千棘「違うわ天の道を行き総てを司どる男よ。」

クラスメイト「そうそうそれだよ。」

聞いてた女子達が思いだし閃いたかのように千棘にそう告げる。

A「凄いわ千棘さん、たった一回でしか聞いてないのに覚えたなんて私達は昨日と合わせて三回聞いたけど頭から抜け落ちてたわ。」

女子b「でも一回目の時けっこうインパクトあつたよね。」

「あく入学式のことですよ

挨拶で突如先生のマイク奪って

自身の自己紹介をするとはあの時驚いたわ。」

千棘「・・・」

この時彼女は話についてこれなくなった。  
総司（現在）の昔話など昨日からしか  
出会ってないのに分かるはずがなかった。  
ゆえに

それでね彼が「あ！あの・・・」ん？

千棘「ちよつとその話は気になるけどその総司は  
今日見かけなつたけど休みなの？」

その話題に流されることはなく本題に  
戻すことができた。別に学校に居ないし休みなのは  
はよいに予想がつくが彼が体が弱そうとか  
体調が悪かったとかそんな印象はなかった。

それ故に学校にいない彼のことが気になったのだ。

そしてようやく聞けるかと思ったが

「総司はね神出鬼没な男だからね。学校に  
いるかも知れないし居ないかもしれないから  
たぶんどつかにいるんじゃない？」

「そうそう昨日見たいに皆と一緒に授業に  
出ることが珍しいんだから。」

千棘「・・・ 教えてくれてありがとう。」

結局彼が学校にいないことの理由は分からず  
じまいだが授業に出ることが珍しいという  
情報を知れたので「まあいいか」と納得した。

・・・

集「やあ転校生の桐崎さん。ちよつといいかな」



千棘「え？なに」

放課後になり突如集と名乗る男子が

私に手紙を渡し

集「んじやまた会いましょう。」

そう言い走り去っていった。

千鳥へ

今日取り敢えず餌やりだけしてくれそれと

あしたから貴女に手紙を渡したメガネ男と

2人に飼育係を任せる。お節介だか夜の

8時から誘拐事件が多発してるから気を付ける

俺、今日からしばらくいないので任せる。

天道総司（一条 楽）

「はあ?」

（しばらく帰らないってどうゆうことよ

約束まもるんでしょね!?)

色々とツツコミ要素の中彼女はそう思い

不満がありながらも飼育場に行くのだった。

……

そしてなんやかんや動物達に餌をやり終え

帰宅しようと校門を通り過ぎた当たりの時。

「桐崎さくん。」

クラス的女子達が私の名を呼んでよみとめる。

「ねえ一緒に女子会しません。」

千棘（え?!）

「カラオケしたり食べたり恋バナとかさあ」

この時複数の女子から初めて誘われて

千棘は

「こ…これが私の夢で見ていた念願の青春」

憧れのシチュエーションに喜んでいた。

彼女の家庭はマフィアな為に普通の学校生活が

送れず苦勞をしていた

そんな念願の願いが今目の前にあるのだから

千棘「良いよ私も遊びに連れてって。」

必然的に誘いに乗るのだった。

クラス女子達は「やったー」なの「歓喜」なの

色々な反応をし千棘の初めての体験をしに

行くのだった。